

11/26

本日協議会日本文に結集せよ！

理院協

講堂にて1いより

出席者

本田（法）原田（経）菅川（商）上林（家）
直木・森川（文）柿木・川口（理）長井・
兼松・南浦（工）藤野・亘（原研）医ナシ
尾崎経研所長 三宅学生部長

本日、念願の學長、協議会團交がもたらる。匝度にわたる予備折衝を通じて、協議会は終始高姿勢でモット我々に対してもうした。一、二度目の折衝では我々は大學の最高意志決定機關である協議會として團交を受けよと主張した。しかしわざず、協議會有志でない限り團交はやらないとつぱね續けた。

又、大學側として責任追及し、謝罪を求めている対象であるから全共斗を組織として試長団に参加するのは認めない。それに文系は正規の自治組織の代表ではなく有志であるから、という理由でこれも試長団への参加を認めないと返事であつた。全共斗に関して當局は断固ゆづらない意向であり、統一試長団は當局の条件をのんでも團交を実現させることの方が優先すると判断した。文系については何より当局の根柢を當局は示していないし、文學部では、教室毎、クラス毎の参加が決定していることもあるて、協議會へもち帰ることを要求した。

二度目ににおける當局の出した条件—文系の試長団参加は認めるが、全共斗メンバー個々人の参加は認めないし、學外者（青医連 厚生學院を意識したもの）は團交への参加もダメである。これが最後の予備折衝であるとみなされていたにもかかわらず、最後に團交を我々に破壊せんとする内容の条件を出してこれは絶対ゆづれないといふように言ってきた。これに対し折衝の席で彼ら當局はいかに陰険なやり方で團交を設定してゐるかを徹底的に追及した。

四席目の最後確認としての折衝において、絶対ゆづれない条件だといつていた内容—全共斗メンバーの試長団不参加と學外者の團交不参加—をまづけなく撤回した。

このような過程を経て本日一時、講堂において學長、協議會（有志）團交がとり行なわれる。ここにおいて我々がまったくソノボサシキに置かれたままほぼ一年間を経過し、最後のどたん場で行動隊導入と当局側の解決の論理で力の收拾がなされたことに對する、當局への責任追及と彼らの論理の徹底的な反駁がなされねばならない。現在の正常化の中で大学問題は隠べされあるいはほやかされていけるか、いつに何か問題であったか。我々は問題の本質と、これまでの斗争の過程で明らかになつた當局との論理のちがいをより層明らかにし、当時の論理を粉碎すべく團交をもつ。

本日一時より講堂で行われる學長・協議會團交に結集せよ！